

書 評

by Elizabeth Foley O'Connor

Pamela Colman Smith: Artist, Feminist and Mystic

角 谷 由 美 子

私にはずっと気になる女性画家がいた。名前はパメラ・コールマン・スミス (Pamela Colman Smith) というが、その名は美術史に載るわけでもなく作品が美術館で展示されるような画家でもない。しかし、私は彼女の絵を78枚も所有している。彼女はタロットカード画家である。数多くあるタロットの中で彼女の描いたデッキが発売以来、一世紀経ってもなお人気があり最もスタンダードとされている。にも拘わらず、タロットを購入した店のポップ広告には彼女は一文無しで死んでいった「不遇な画家」であり、没年の後ろには「？」が付されていた。浅黒い肌の彼女の写真を前にして私の頭にも「？」が浮かんだ。印税は入ってこなかったのだろうか、没年さえ確かでないなんて、と。そんな私の長年の素朴な、しかし大きな矛盾に初めて文学的にアプローチした専門書が2021年に登場した。Elizabeth Foley O'Connorによる *Pamela Colman Smith: Artist, Feminist, and Mystic* である。これまでコールマンの功績はオカルト界においてのみ語り継がれていたが、本書により彼女の画家としてばかりではなく、時に作家として、またフェミニストとしての活動が明らかになった。驚くほど多くの著名な文化人との交流があったにも拘わらず、コールマンを「不遇」にせざるを得なかった19世紀末から20世紀前半における人種、階級差別と、芸術界における性差別が露見される。

著者は早くも「Introduction」で、私がタロットを手にした時に見落として

いた問題を指摘する。タロットには様々なバージョンが存在するため、それぞれに名称がある。しかし、世界最大のベストセラーとなったコールマン作のデッキは「コールマンタロット」とは呼ばれない。「The Rider Tarot Deck」、もしくは「The Waite Tarot」、「The Rider-Waite Tarot」と呼ばれ、画家の名前はパックの裏面に見つけられる程度である。「Rider」とは最初に発売したロンドンの出版社の名前で、「Waite」はこのデッキを監修した著名なオカルト主義者アーサー・エドワード・ウェイト（Arthur Edward Waite）の名前である。コールマンとウェイトは共に19世紀末のイギリスの魔術結社「黄金の夜明け団」（The Golden Dawn）のメンバーであったが、主要団員であり多くの著書と学識を持つウェイトの陰に彼女の名はずっと隠れていた。画家への敬意を表しこのデッキを「Waite-Smith」、「Smith-Waite」版と呼ぶようになったのは今世紀に入ってからのことである。そもそもコールマンが黄金の夜明け団に入団するきっかけを作ったのは W. B. イェイツ（W. B. Yeats）であったが、彼女の人生はよく大物の男性著名人と一瞬、交差する。しかし、そこから足を踏み入れた世界はことごとく男社会であり、つまはじきにされるか、嫌気がさして彼女から去っていくかであった。このタロットの名称問題はオカルト界と芸術界における女性軽視の「ミソジニー」をすでに象徴していたのである。

第一章ではコールマンの出生と青春時代に触れたジャマイカ文化が紹介される。コールマンは1878年2月16日、名家出身のアメリカ人の両親の元に一人っ子としてロンドンで生まれた。両親の出入国記録や Colman という苗字から、おそらく父方、母方共に親戚縁者がジャマイカ出身だろうと推測される。コールマンの母方の祖父はニューヨークとボストンで有名な本屋兼出版社を営んでいた。ユニークな店だったようで、18世紀のスウェーデンの神秘主義神学者エマヌエル・スウェーデンボルグ（Emanuel Swedenborg）にまつわる書物を扱っていた。祖母はフランスやドイツの妖精物語を子供向けに書き直し出版していた。コールマンの芸術的才能のルーツは母方の祖父母にあるのかもしれない。父方はビジネスに成功した一家であった。結婚後、父はニューヨークの繊維会社におそらく役員レベルで勤務、投資していたが倒産。自己破産した一家は逃

げるようにジャマイカへ移った。1889年、コールマンが十一歳の時である。それから十八歳までの七年間ジャマイカとニューヨークを行き来することになる。ジャマイカで一家はイギリス人総督など上流階級との付き合いもあったが、彼女を魅了したのは上品ぶった堅苦しい西洋人ではなくジャマイカ人の日常生活だった。特に現地の神話や魔術、言葉を気に入り、後に彼女はアフリカ伝承の民話『アナンシ物語 (Anansi Stories)』を出版することとなる。

第二章ではコールマンが出会った二人の恩師と、男性が牛耳る出版界の実情が語られる。一人目の恩師はデザイン教育の礎を築いたアーサー・ウェズリー・ダウ (Arthur Wesley Dow) である。ブルックリンにある美術学校のプラット・インスティテュートで彼が教鞭を執り始めた1895年、コールマンは生徒として在籍していた。彼女はダウが傾倒していたジャポニズムの「濃淡」技術を学んだ。また彼が招待したアーネスト・フェノロサ (Ernest Fenollosa) による学内講演でコールマンは初めて共感覚 (synesthesia) という概念を知ったが、後にその感覚を使って才能を開花させる。1897年秋、彼女は突如プラットを中退。イラストレーター兼作家のハワード・パイル (Howard Pyle) に師事するためフィラデルフィアのドレクセル・インスティテュートを訪ねる。パイルはコールマンが幼少期から慣れ親しんでいたスウェーデンボルグの信仰者であり、彼の書いたロビンフッドやアーサー王物語や絵が大好きだった。結局、コールマンはドレクセルに入学出来なかったがパイルは彼女の才能を認めた。ダウとパイルは共に写実力よりもコールマンの想像力と独創性を評価したのだが出版界は違った。1900年前後、本や雑誌に女性読者が増えるにつれ女性イラストレーターが急増したが、採用されるのは依然男性による力強い絵かそれを真似た女性イラストレーターだった。コールマンが描く個性的で女性らしい繊細なイラストの評判は芳しくなく売り込むのが困難だった。

第三章では、1900年代初頭における彼女を取り巻く激動の人間関係が明かされる。十八歳で母親を、二十一歳で父親を相次いで病気で亡くしたコールマンが母代わりに慕ったのがシェイクスピア劇で有名な舞台女優エレン・テリー (Ellen Terry) である。シャーロック・ホームズ役で売れた父方の従兄のウィ

リアム・ジレット (William Gillette) を通しニューヨークで巡業中のテリーと知り合い、衣装やステージデザインを手掛けるようになる。父の死後、親交を深めた二人は1900年、ニューヨークから故郷イギリスへと戻った。テリーはコールマンに「ピクシー (Pixie)」というあだ名をつけ可愛がった。「妖精」を意味する「pixie」は、コールマンが持つジェンダーレスで捉えどころのないアイデンティティーにぴったりだったのだろう。この頃、コールマンは (音楽を聴いていると絵が見えたり、絵画を見ていると音が聞こえたりする) 「共感覚」を初めて体験し「Music Picture」を描き始める。また、テリーの息子ゴードン・クレイグ (Gordon Craig) を通してアイルランド文芸復興運動を知り、イエイツ一家との親睦を深める。W. B. イェイツはコールマンが手掛けたアビー劇場の舞台デザインとミニチュア・シアターを称賛し、コールマンはイェイツの描くケルトのスピリチュアルな世界に魅了された。イェイツの弟であるジャック (Jack B. Yeats) とも意気投合し1902年から *A Broad Sheet* という小雑誌を共同編集するようになった。しかし、ジャックとの衝突から一年ほどでこの仕事を辞め、イェイツに相談しながら1903年、自らが編集、出版まで行う小雑誌 *The Green Sheaf* を刊行する。これも一年ほどで打ち切りになるが、後半はフェミニスト的な主張の強いコールマンの絵や詩が掲載されるようになった。

第四章は作家としてのコールマンに光を当てる。ジャマイカで見聞きしていた民話を *Anansi Stories* として1899年に出版する。他の作家による蜘蛛人間アナンシの物語とは違い、彼女は全編、標準英語ではなく現地のクレオール語で書きおろし、「オベア」という昔からジャマイカに伝わる黒魔術を行う女性の存在を強調した。クレオール語は白人読者には不人気だったが、出版前後に彼女が精力的に行った読み聞かせ劇ではクレオール語でも面白さが伝わり、アメリカで披露した時にはマーク・トゥエイン (Mark Twain) も楽しんだ。1904年には *Green Sheaf Press* という出版社を立ち上げ、アナンシの仲間である鳥や蛙、猫などを主人公にした童話 *Chim-Chim* を1905年に出版する。*Green Sheaf Press* は設立から経営困難による閉鎖までの二年間で合計十冊を出版し

た。主にコールマンは女性作家の出版を引き受け、その中にはアーツ・アンド・クラフト運動の主導者であったアーネスト・ラドフォード (Ernest Radford) の妻、ドリー・ラドフォード (Dollie) や、エレン・テリーの娘のパートナーであった脚本家クリストファー・セント・ジョン (Christopher St. John) などが含まれる。絵画の方では、写真界の巨匠アルフレッド・ステイーグリッツ (Alfred Stieglitz) がニューヨークに持つ291ギャラリーで1907年から二年間で三回の展覧会を催した。このギャラリーで単独かつ写真以外を展示するのは彼女が初めてであった。作家としても画家としてもコールマンには似たような評価が寄せられた。男性批評家たちははじめは彼女の独創性と想像力を褒めるものの、他の男性アーティストと比べ技術面の未熟さを指摘し、仕舞いにはジャマイカ文化も含め彼女を嘲笑し始めた。

第五章ではタロット画制作の背景が語られる。これまでもコールマンが非常に僅かな報酬で78枚のタロット画を完成させたことはオカルト研究においても語られていた。本書の新たな発見はその制作時期である。それまでコールマンの黄金の夜明け団への入会は1901年、1908年にタロット画が制作され始め、1909年完成と考えられていた。しかし、著者はコールマンの画法から1907年には作画に取り掛かっていたのではないかと推測する。なぜなら、1907年から頻繁に描き出した Music Picture で用いられる、ドイツ語で「Rückenfigur」と言われる人物を背面から描いた構図が多くのタロット画にも登場していることと、タロットで重要視される塔のイメージ画が Music Picture にも認められるからである。しかし、おそらく著者の意図は厳密な作画時期の確定ではない。ウェイトによるオカルト指導によりゼロから構図を考えたのではなく、コールマンにはもともと Rückenfigur という手法に込められる「解放」や「自由」への憧れ、また塔に象徴される「父権」や「父系制度」への反発があり、たまたまそれを依頼されたタロット画に投影したに過ぎないと主張したいのであろう。事実、コールマンはこのタロット画制作以降、本格的に婦人参政権運動に傾倒していく。ローレンス・ハウスマン (Laurence Housman) が婦人参政権運動のために作ったスタジオ「Suffrage Atelier」に数々のポスターを提供し

た。その他、運動に参加する女性達の経済的援助を行った記録も残っている。

エピローグでは晩年について触れられている。1911年、33歳で彼女はローマカトリックに改宗する。1903年の黄金の夜明け団の分裂の際、彼女は Stella Matutina という新たな魔術結社を設立したイエイツと袂を分かち、キリスト教神秘主義を貫くウェイトに付いていったことから、彼女にとってこの決断はごく自然な経緯であったのだろう。第一次世界大戦中は婦人参政権運動に参加しながら、自らの創作にも熱心で個展や小説への挿絵提供、赤十字のためのバザー開催などに励んだ。しかし、1919年、おじからの遺産でコーンウォールに一軒家を購入し定住してから彼女の創作意欲は低下した。代わりにカトリック信者としての奉仕活動に専念し、カトリック教会の再建に協力したりロンドンから来る神父をもてなしたりした。彼女はこのような活動のため、精神病患者扱いされるほど再三に渡りプリマス司教に資金援助を請うた。1920年代、彼女の Music Picture がオーストラリアやロンドンの雑誌で取り上げられ画家としての復活の兆しもあったが、それも一瞬であった。タロット画を含め、全てのイラストにはほんの僅かな報酬しか恵まれなかった彼女は晩年、相当お金に苦しんだ。コーンウォールの家を手放し、1951年、七十三歳で亡くなるまでの二十五年間を共にしたノラ・レイク (Nora Lake) に遺言で遺産を託したが、埋葬料もないほどであったために残った財産は全てオークションにかけられたが、それでも借金の一部返済にしかならなかった。なお、ノラとはどこまでの同性愛的関係にあったかは明らかにはされていない。

かつて、ここまでつまびらかにコールマンの人生を語った書物は存在しなかった。どれも断片的かつバイアスの掛かった情報でしかなかった。著者の五年以上にわたるコールマン研究において一貫して強調されるのはコールマンの「新しさ」である。19世紀末、女流画家でありながら作家でもあり、出版社を立ち上げ、雑貨店の経営もした。ロンドンでは自らのアトリエに毎週、作家や芸術家、俳優を招き、自らの作品を披露しては様々な議論に花を咲かせていたという。これがもし、彼女が男性でないにしても確固たる白人エリートのパックグラウンドを持っていればブルームズベリーに匹敵するサロンになったのか

もしれない。本書で浮かび上がるのはモダニズムという時流の周縁に存在した無数の名もなき「モダニスト」たちである。これまで著名な作家や芸術家の陰に隠れ、その功績の割には日の目を見ることのなかった一女流アーティストの人生に触れ、改めて私はこのモダニズムという反発力のある時代の研究の奥深さと面白さを感じた。

(2021, Clemson UP)

